

久野: 科学者の社会的責任  
—— 職業倫理と市民倫 ——

1. 科学者(自然・社会・人文)の社会的責任(科学者として及び市民として)

2. 丁史的に.

=+ 若くは入ってから、科学はひたすら意味で生産手段に影響するばかりでなく、その自身生産手段の役割を演じている。

しかし口先、社会には対立が存在し、生産手段は全体の福祉のために使われていなければならない。このことから社会的責任が生まれる。

3. 責任とどうするに科学者の果せるかのところから、どういふ形で近代科学が発達して来たか、近代科学の理論構造、科学が社会において実現される過程とつきとめること、からえられる。

4. 科学の知識は、没価値的仮説の積み重ねとして成り立っている。あらゆる科学に共通しているのは、初期条件と、結果と、普遍的法則の三つの要素の相互関連にあるというパターンである。

この frame work は、単体でしか存在せず、それと使ったことで初めて主眼が扱われる。

5. Max Weber にすれば、

上の理論主体と、実践主体との間の区別に対する禁欲及び科学の専門化は必要としない。

これは専門的科学的オートノミーと研究の自由を確保する条件である。

丁史は運命的なものである。

6. しかしこの前提にはコオペレーションの過程がかかっている。

Bartland Russel. にすれば、ギルド・ソシアリズム即ち、グループ・ソングによって自由と組織との調節。

7. 全過程は個別科学からは durchsichtig ではない。

分業の機軸の仕方とよめる社会の生産手段についての見方からすると、科学者は自分の仕事を進めなければならないし社会へ及ぼす影響も大きくいられない。

8. 科学者が社会的責任を果たすには、総合科学の仮説を

とらわばならん。

二に二つの面

(i)隣り合う仮説の体系化により、仮説の便わい  
る様を総合科学の側から社会に対して指定  
する。者

(ii)社会科学の協力により、社会の構造と運動  
を見透すようになす。

このため、には、未来の社会に対するイメージ  
と通らわばならんのか、逆子のぬいのか、  
か、それは可能かの検討。

9. Max Weberによれば、科学者の態度と市民の態度との  
間に、緊張を感じさせるような分岐はなされる。

しかし、孤立した市民は科学の実践主体にはなりえ  
ない。

スペシャル・プロセスと意識的に計画し、形成する  
個人としての自由と電人としての専断、専断的  
実践的市民の存在が基本的問題。

こういふ専断的市民ができているとすれば、専断的  
主体における科学者はその一つの方科となる。